



# 卓越與文化內涵兼具之外語教育

In Search of Excellence and Enlightening in  
Foreign Language Teaching

第九屆

海峽兩岸外語教學研討會論文集

Proceedings of the 9th Cross-Strait Conference on  
Foreign Language Teaching & Learning



主編 蘇其康

立滙外語大學

- 堀越和男 a:〈台湾における日本語学習の動機づけと大学の成績との関係—好成績取得者の動機づけタイプの探索—〉,《淡江外語論叢》15, 淡江大學, 2010年6月。
- 堀越和男 b:〈動機づけと学習ストラテジーが日本語学習の成果に与える影響—台湾の日本語学科で学ぶ学習者を対象に—〉,《台湾日本語文學報》28, 台湾日本語文學會, 2010年12月。
- 宮崎里司・J.V.ネウストプニー(編):《日本語教育と日本語学習—学習ストラテジー論にむけて—》,東京:くろしお出版,1999年。
- 大和隆介:〈学習ストラテジーを取り入れた言語指導—海外の指導法が示唆するもの—〉,《岐阜大学教育学部研究報告 人文科学》52, 岐阜:岐阜大学,2003年。
- 米山朝二・関昭典(訳):《動機づけを高める英語指導ストラテジー35》,東京:大修館書店,2005年。(Dörnyei, Z. *Motivational Strategies in the Language Classroom*. Cambridge: Cambridge University Press, 2001.)
- 林明煌:〈台湾大学生の日本語学習ストラテジー調査票(SIJLL)の開発〉,《台湾日本語文學報》28,台北:台湾日本語文學會,2010年。
- 盧錦姬:〈台湾の大学生の日本語学習ビリーフと学習ストラテジーに関する調査研究—日本語専攻者を中心として—〉,《台湾日本語文學報》30,台北:台湾日本語文學會,2011年。
- 吳如惠:〈言語学習ストラテジー使用についての調査研究〉,《銘傳日本語教育》第3期,台北:銘傳大學,2000年。
- Gardner, R. & Lambert, W. *Attitudes and Motivation in Second Language Learning*, New York: Newbury House, 1972.
- Glaser, B. & Strauss, A. *The discovery of grounded theory: strategies for qualitative research*. Chicago: Aldine, 1967.
- Ramage, K. "Motivational factors and persistence in foreign language study," *Language learning*, 40, 1990.

## 発話能力の異なる日本語学習者における ビリーフの相違 —文藻外語学院の場合—

文藻外語學院日本語文系 久保田佐和子

### 摘要

本稿内容為調査台湾文藻外語學院中的日文學習者的 Beliefs, 並與其會話能力的比較。調査對象為筆者所任教之大學三年級會話課的學生, 使用 BALLI 來調查學生的 Beliefs, 而會話能力則是使用 OPI 來做為判定基準。並將判定擁有上級會話能力的學習者與初級會話能力的學習者的 Beliefs 來進行分析比較。比較結果發現, 於 BALLI 的 34 個項目中, 有 5 個項目有差異。在考察產生差異的原因時, 發現上級會話者因感覺自己在學習上獲得成就感, 所以對自己的能力抱持著肯定的態度。另一方面, 初級會話者感覺自己並沒有獲得實際的學習成果, 所以感受到他們對自己的能力較沒有自信。從結果來看, 可以看到「正面思考的高級會話者、負面思考的初級會話者」的對比。分別兩者的基準並非具體的學習方法等 Beliefs 的差異, 而是自信的有無等心理層面上的差異。

另外兩者在動機上也有差異。雖然兩者都對日文可以幫助未來就職這點感到肯定, 但在肯定的強度上, 上級會話者相較於初級會話者較為弱。造成此差異的原因, 推測其原因為台灣的日文學習者的學習動機比重由外在動機轉至內在動機的變化。

**關鍵字:** Beliefs、會話能力等級、BALLI、OPI

### Abstract

This paper compares the beliefs of Japanese learners at different levels of oral proficiency, and investigates the difference between novice level learner and advanced level learner in Wenzao Ursuline College of Languages. Horwitz's (1987) Beliefs about Language Learning Inventory and ACTFL-OPI are used in this research.

As a result, advanced level learners think positively of themselves and be

more confident in their own abilities through their actual experience; however, novice level learners think negatively of themselves and be less confident in their own abilities through their actual experience in the contrast. The difference between them lies in not the difference of practical beliefs such as strategy but that of mental beliefs such as confidence.

**Keywords:** Beliefs, oral proficiency levels, BALLI, OPI

### 要旨

本稿は文藻外語学院における日本語学習者のビリーフを調査し、発話レベルでの比較を行った。ビリーフの調査には BALLI を使用し、発話レベルの判定には OPI を用いた。そして上級レベルと初級レベルに判定された学習者のビリーフを比較した。結果、上級話者は習得の実感を踏まえた自らの能力を肯定的に捉えていることがわかった。一方、初級話者は、自らの能力に対して自信のなさが窺われた。「よりポジティブな上級話者、よりネガティブな初級話者」という対比が見て取れ、両話者を分けたものは、具体的な学習方法などに対するビリーフの相違ではなく、自信の有無などの心理面でのビリーフの相違であった。

また動機についても差があった。どちらも日本語は将来仕事を見つけるのに役立つと肯定的ではあったが、強弱では上級話者ほうが弱かった。その要因は、外発的動機から内発的動機に比重が移行している台湾における日本語学習者の動機変化にあると推察された。

**キーワード:** ビリーフ、発話レベル、BALLI、OPI

### 1. はじめに

第二言語習得の目的が外国語の習得であるという必然性から、言語習得過程において個人差による「言語学習の適性」はあるのか、さらには、その適性となりうる要因はどこにあるのか探るべく、日々研究が行われている。言語学習における「適性」をめぐる研究は、その要因が先天的に有する個々の性別、国、人種、母語の性質、IQなどに起因しているというものから、後天的な学習開始年齢、学習環境、学習スタイル、学習

ストラテジー、さらには、もっと心理的な動機付け、ビリーフなどに起因しているというもので多岐に渡る。学習者個人についても学習開始年齢、母語、性別、学習環境、心理的な要因などが異なるため、これらの研究結果は第二言語習得過程究明に示唆するものが多い。

著者は台湾の文藻外語学院(以下、本校)に所属しているが、本校学習者の日本語習得状況を調べるため、会話を担当する大学3年生のクラスを対象として OPI(Oral Proficiency Interview)を用いた会話クラスの実態調査を3年間続けている。調査は毎年異なった対象者にしているにも関わらず、大部分の学習者の発話レベルは中級に属していること、学習者の発話レベルは初級から上級までのばらつきがあること、など毎年同様の結果を示している。対象とした学習者は、無論のこと同じ学校で同じ教育を受けており、さらには、国、年齢、人種、母語など多くのバックグラウンドが共通している。しかしながら、発話の習得状況においては、もはや同じクラスで教えることは困難なほど、差が広がっている。はたして、この習得状況の差はどこから生じたのだろうか。学習者が同じ学習環境にいるならば、学習スタイルなどを含む学習方法や信念、学習態度や姿勢といったものに他ならないのではなからうか。そこで、本校学習者にビリーフ調査を行い、発話レベルの違いから比較する。調査には Horwitz(1987)の開発した BALLI(Beliefs About Language Learning Inventory)を用いる。また発話レベルは OPI の上級レベルの話者と初級レベルの話者(以下、上級話者と初級話者)を比較し、差のあるものには要因を考察する。そして考察から、本校へよりよい授業への提言をしたい。

一般的に台湾の日本語学習者は会話に対して苦手意識を持っている者が多いとされる。そのためか、高等教育機関に所属しながらも、卒業までに OPI で上級まで達する学習者は少ないように感じている。本校学習者への考察から、到達への「狭き門」である上級話者のビリーフに少しでも迫りたい。また本調査の結果は本校だけではなく、台湾の他の高等教育機関に対しても、よりよい学習指導が示唆できるものと考えられる。

## 2. 先行研究

### 2.1 ビリーフについて

『新版 日本語教育事典』はビリーフを「言語学習についての信念(ビリーフ)とは、言語学習の方法・効果などについて人が自覚的、無自覚にもっている信念や確信を指す」としている(p.807)。またビリーフの調査には Horwitz(1987)によって開発された BALLI を基にしたものが用いられることが多い。BALLI は 5 領域 34 項目から構成された質問紙調査票であり、①強く賛成する、②賛成する、③どちらでもない、④反対する、⑤強く反対するの 5 件法から成る。Horwitz(1987)が設定した 5 領域は、言語学習の適性(9 項目)、言語学習の難易度(6 項目)、言語学習の本質(6 項目)、学習ストラテジーとコミュニケーション・ストラテジー(以下、学習 ST、コミュニケーション ST)(8 項目)、言語学習の動機(5 項目)である<sup>1</sup>。

BALLI を使用したビリーフ調査は、2011 年現在でも多くの国と地域で行われているが、時代や地域に沿った内容にすべきだという指摘もある。そのため、BALLI を基本としながらも、項目の一部を変更した調査票が用いられことが多い。また同様の質問項目を設定していても、領域の振り分けでは Horwitz(1987)と異なる場合もある。

台湾で BALLI を用いた研究には、まず服部(2002)、また林(2010)などがあげられる。また、近年行われた大規模なビリーフ調査には盧(2010, 2011)がある。盧(2010)は台湾の 10 校の大学および技術学院で日本語を主専攻とする学習者 879 名に調査を行った。調査結果として、(1)外国語学習に才能のある人がいるが、自分にはその才能がないと考えている人が多いこと、(2)日本語は中程度に難しい言語であると感じているが、自分はいつか上手に話せるようになると前向きなビリーフを持っていること、(3)台湾の日本語学習者は日本社会との関係に多くを期待していることを指摘している。また学習期間、性別、成績の高低によるビリーフの違いを比較し、それぞれある程度の差があったと述べている。具体的には、学年差は大学 2 年生と 4 年生の比較を行い、結果、前者は前向き

でグループでの学習を好むビリーフがより支持されていたが、後者はグループでの活動を好まず個人的・受動的なビリーフがより支持されたとしている。性別については、男性は問題を解決しようとする積極的なビリーフをより支持しているが、女性は日本語学習によるビジネスチャンスより期待する一方、日本人の前では消極的で恥ずかしがる傾向のビリーフを持っているということである。成績については、上・中・下の三群に分けて比較を行った結果、下位群は自己に否定的なイメージを抱いており、それが日本語学習への自信を低下させ、クラスでの積極的な発言を抑制していると述べている。

さらに、盧(2011)では台湾の 9 校の大学および技術学院の 3 年生(日本語主専攻 472 名)と教師 46 名に調査を行った。そして学習者内の特徴を分析し、大学に所属する台湾人日本語学習者のビリーフ傾向を指摘している。具体的には(1)学習者は学習での間違いを恐れている、(2)反復練習や暗記などの伝統的な学習方法が支持されている、(3)学習分野は「語彙」「翻訳」「文法」の順に重視している、(4)「話す」技能は「書く」技能よりも難しいと感じている、(5)日本語は「中程度に難しい」と感じている、(6)学習者は教師主導型の授業に慣れており、教師に依存した傾向が見られる、(7)初めての日本語の教師は日本語の学習に大きな影響を与える、(8)学習者は文法解説において媒体語が必要だと考えている、(9)学習者はよりコミュニカティブな教室活動を望んでいる、(10)日本文化に触れることは日本語学習に役立つと考えている、と指摘している。また教師と学習者を比較した結果についても、ある程度のギャップや差異が存在していると述べている。

盧(2010, 2011)のビリーフ調査は、台湾の大学・技術学院を対象としていた。その調査対象も前者が 10 校 879 名、後者が 9 校 472 名と大規模な調査である。そのため、今後台湾における日本語学習者のビリーフ調査の基礎資料となりうるだろう。

さらに、久保田(2012)は盧(2010, 2011)のビリーフ調査の結果が本校を含めて一般化されるのかどうかということに疑問を抱き、本校の日本語学習者のビリーフを調査した。結果として、盧(2010, 2011)の調査結果とほぼ同様の結果を示したことにより、本校の学習者は、台湾の一般

<sup>1</sup> 括弧内は領域内の質問項目数。なお調査により項目数は異なる場合がある、括弧内は本調査で用いた BALLI の項目数を表す。

的な日本語学習者と同様のビリーフを持っていると述べている。

このように近年台湾におけるビリーフ研究は動機研究、学習ストラテジー研究など、BALLIを基にした調査が盛んに行われている。また対象は研究者が所属している教育機関の調査に留まらず、より大規模でより体系的な調査と分析が行われている。なお、BALLI以外の質問紙を用いた代表的な調査には、堀越<sup>2</sup>(2006, 2007, 2010:06, 2010:12)や盧錦姫(2009)などの動機づけ研究や、荒井智子(2007)、林明煌(2007, 2010:12)、盧錦姫(2010, 2011:03, 2011:06, 2011:12, 2012)などの学習ストラテジー及び学習スタイル研究などがある。

## 2.2 OPI について

OPI(Oral Proficiency Interview)は ACTFL(American Council on the Teaching of Foreign Language)によって開発された口頭能力インタビュー試験であり、約 40 か国語で使用されている(牧野他, 2001)。OPI では発話で何ができ、何ができないかというパターンを見極めることにより、言語運用を総合的に測定する(牧野他, 1999:11)。レベルは「超級」「上級」「中級」「初級」の主要レベルと、サブレベルの「上」「中」「下」が設定されている。そして合計 10 段階のレベル判定をテスター有資格者が判定する。

また判断の基準には、①学習者が果たすことができる機能、あるいは総合的タスク、②学習者が対応し得る社会的場面と特定の話題領域、③これらのタスクが遂行される際の正確さ、あるいは的確さ、④学習者が作れる口頭のテキスト、あるいは談話の型の 4 つがある。

OPI を生かした研究は多く行われているが、その手法はインタビューの手順や方法を利用した研究と、学習者の発話をデータとして用いるものに分けることができる(牧野他, 2001:170-171)。また前者は、さらに、①発話テストの開発に対する研究、②教授法の開発に関する研究に分けられ、後者は③言葉そのものに関する研究、④言葉の習得に関する研究に分けられる。なお、OPI データは言語資料としてコーパスやデータベースとしても用いられ、多くの研究者に利用されている。

台湾において OPI を用いた学習者研究は少ない。知見の限りでは小林

(2001)、工藤(2001)、久保田(2010)がある。このなかで学習者の会話運用能力のレベルを判定したものには工藤(2001)、久保田(2010)がある。結果として、主要レベルは「中級」が大半を占めること、「初級—上」から「上級—中」まで存在し、ばらつきが激しいことが両者から指摘されている。

久保田(2012)は横山(2004)の先行研究の手法を用いて、本校学習者の OPI レベルと旧日本語能力試験(以下、旧日能試)の結果についての相関性を検証した。結果、一般的に台湾の日本語学習者の発話能力は弱いと言われているが、比較の結果についても実際の発話能力が不足していることが指摘された。また旧日能試 2 級合格者の発話能力が「中級」に留まっているという結果からも、台湾において学習者の発話能力が「上級」に達するのは難しいことをあげた。

## 3. 調査概要

### 3.1 調査目的

本調査の目的は OPI で「上級」と判定された学習者と「初級」と判定された学習者間のビリーフを比較することにある。目的の詳細を以下に示す。

1. 本校における上級話者と初級話者のビリーフを比較する。
2. 比較で差のあった質問項目には要因を考察する。
3. 考察を基に本校の会話の授業へ提言をする。

### 3.2 調査票

ビリーフ調査には Horwitz(1987)によって開発された BALLI(Beliefs About Language Learning Inventory)を用いた。本調査では過去に行われた調査結果と比較しやすいように、本来の BALLI に忠実な 5 領域 34 項目の日本語訳に中国語訳をつけたものを用いた。なお、BALLI の 5 件法は最も支持が強い「強く賛成する」が①であり、最も反対が強い「強く反対する」が⑤である。つまり数値が低いほうが「賛成寄り」の意見となり、数値が大きいが「反対寄り」の意見となる。

### 3.3 調査対象と手順

調査は 2010 年から 2011 年にかけて、著者が会話の授業を担当した 3

<sup>2</sup> 堀越(2010:12)は、動機づけと学習ストラテジーを組み合わせた研究である。

つのクラスに対して行われた。対象としたのは本校で日本語を専攻している四技部(四年制大学部)3年生である。1回目の調査は1クラスにあたる51名に対して行い、2回目の調査は2クラスにあたる95名に対して行った。

調査手順は、まず2010年9月(学期初め)に1回目である51名にビリーフ調査を行い、その後2010年10月から12月にかけて、テスター有資格者2名(著者を含む)がOPIのインタビューを行った。インタビューは2011年2月までにレベル判定を行い、両者の判定が一致したデータを採用した。次2回目の調査95名も、先と同様に学期初めである2011年9月に行った。また手順についても1回目の調査と同様に行った。以上の手順でビリーフ調査の記入漏れがなく、且つOPIの判定も一致したのは130名であった。

本調査では、上級話者と初級話者のビリーフを比較するという目的から、「上級」と判定された14名と「初級」と判定された19名、計33名のデータを使用することとする。なお、33名の属性は性別が男性6名、女性27名、年齢が20歳から24歳までであり、また日本語学習歴については、ばらつきが見られた。以下、表1に33名の属性、表2に本校130名のOPIレベル判定結果を示す。

表1 対象者の性別、年齢、日本語学習年数(N=33)

	性別		年齢	日本語学習歴			
	男	女	20-24歳	2年	3年	4年	5年
上級話者	4	10	14		1		13
初級話者	3	16	19	10	1	3	5

表2 OPIによるレベル判定結果(N=130)

OPI	初上	初中	初上	中下	中中	中上	上下	上中	上上	超級
人数	0	0	19	31	39	27	12	2	0	0
%	0%	0%	15%	24%	30%	21%	9%	2%	0%	0%

### 3.4 分析方法

分析方法は、調査票の34項目をOPIの口頭運用能力判定により「上級」と「初級」に分けて集計し、t検定<sup>3</sup>でそれぞれの項目の平均値に差があるかどうかを比較する。また、包括的に分析できるように中央値である3.0を起点として、平均値が低いものを「賛成寄り」の支持とし、高いものを「反対寄り」の支持とする。

### 4. 結果と考察

本校における口頭運用能力別日本語学習者のビリーフの特徴を明らかにするために、調査票の34項目をt検定の結果、5つの項目に有意差があった。有意差があったものを表下に記す(表3)。

<sup>3</sup> 2群の平均値の差の検定(対応あり)。SPSS version20を使用。

表3 上級話者と初級話者におけるビリーフの相違

項目	領域	項目	上級話者 (N=14)		初級話者 (N=19)		t検定値
			平均値	賛成 寄り	平均値	賛成 寄り	
5	言語学習 の難しさ	私は日本語 が上手に話 せるようにな ると信じて いる。	平均値	1.79	賛成 寄り	2.32	t=-2.28, df=27.35, p<.05
			標準偏差	0.43		0.89	
16	言語学習 の適性	私は外国語 を学習する 特別な能力 を持っている。	平均値	2.71	賛成 寄り	3.32	t=-2.08, df=31, p<.05
			標準偏差	0.99		0.67	
21	学習 ST、 コミュニ ケーション ST	私は他の人 と日本語を 話すことに 自信がない。	平均値	3.36	反対 寄り	2.05	t=4.05 df=19.26 p<.01
			標準偏差	1.08		0.62	
29	言語学習 の動機	日本語を学 習したら、い い仕事のチ ャンスがあ ると思っ ている。	平均値	2.64	賛成 寄り	1.89	t=2.37 df=31 p<.05
			標準偏差	0.93		0.88	
33	言語学習 の適性	誰でも外国 語が話せる ようになる。	平均値	1.29	賛成 寄り	1.79	t=-2.52 df=31 p<.05
			標準偏差	0.45		0.63	

結果は4領域5項目にビリーフの差が見られた。両話者で支持が共通する項目は3領域3項目、支持が異なるものは2領域2項目であった。また支持が共通する項目については、両話者ともに「賛成寄り」の支持であった。以下、領域ごとに考察を行う。

「言語学習の難しさ」領域の「5.私は日本語が上手に話せるようになると信じている」というビリーフについてはどちらも「賛成寄り」では

あったが、上級話者はより強い信念を持っていることがわかる。これは上級話者がより強く自らの能力を信じ、「必ず上手になってみせる」という強い意志を持って学習に臨んでいる現れであると考えられる。また、上級話者はネイティブとのコミュニケーションがある程度不自由のない能力を得ていることにより、実感を踏まえた自信の現れでもあるだろう。一方、初級話者は信念はあるものの上級話者ほどの強い意志ではない。会話上級者になるまで、時間を要する彼らにとって、まだまだ先のことで、実感が湧かないのかもしれない。或いは、上級話者ほど強くは、上手になりたいと思っていないのかもしれない。しかしながら、「賛成寄り」のビリーフであることから、程度の差こそあれ、自らの会話能力がいつかは上手になると捉えているようである。

「言語学習の適性」領域の「16. 私は外国語を学習する特別な能力を持っている」では上級話者が「賛成寄り」であったのに対し、初級話者は「反対寄り」だった。また「33. 誰でも外国語が話せるようになる」では両話者ともに「賛成寄り」の支持ではあったが、上級話者の信念のほうが強かった。まず上級話者については、誰でも外国語が話せるようになること、自分には外国語学習の特別な能力があるという一種矛盾した信念を持っていることがわかる。しかし、この矛盾は、上級話者が自らを含め全ての人を持つ言語習得能力を肯定的に捉えている結果にすぎないと考えられる。先の林(2010)が指摘するように、日本語能力が高い学習者は問題解決に対する自己への有能感・信頼感を強く持っていることが指摘されているが、上級話者の言語習得に対するポジティブな考えは、学習者自身だけではなく、全ての学習者に向けられているものと捉えられないだろうか。

特に16項目は会話も含め言語習得に必要な信念であると思われる。そのため16項目に初級話者と上級話者に差があり、しかも初級話者は「反対寄り」であったことは、会話習得へのあきらめ、もしくは能力に対する自信のなさが窺える。上級話者は、誰でも外国語が上手になると信じているなかで、自らもそのひとりだと感じていること、その一方で、初級話者は、誰でも上手になると信じているにもかかわらず、自分にはその能力がないと感じているのである。このことから、「ポジティブな上級話者、それに対し

てややネガティブな初級話者」という対比が見て取れた。

「学習 ST とコミュニケーション ST」領域の「21. 私は他の人と日本語を話すことに自信がない」でも差が見られ、上級話者は「反対寄り」の支持であり、初級話者は「賛成寄り」の支持だった。これについても先の「言語学習の難しさ」領域と「言語学習の適性」領域で指摘したように、上級話者はコミュニケーション能力を獲得しているという実感と自己の能力を肯定的に捉えているものであり、初級話者は実感のなさや能力に対する自信のなさであると考えられる。

「言語学習の動機」領域の「29. 日本語を学習したら、いい仕事のチャンスがあると思っている」では両話者とも「賛成寄り」であったが、初級者のほうがより強い支持であることがわかった。発話能力の高い上級話者にとって、よい仕事のチャンスを得られるということは、当然ながら大きな動機づけとなると考えていたが、実際は予想とは異なっていた。つまり上級話者にとって将来の仕事へのチャンスは、可能性は否定してはいないものの十分な動機とはなり得ていない。では、いったい何が上級話者の学習動機、もしくは学習継続への動機となり得ているのだろうか。それは学習者の生活環境から推察することができる。つまり日本のサブカルチャーが上級話者の学習動機や学習継続の動機となり得ているのではなかろうか。台湾の日本語学習者の動機については堀越(2006, 2010, 2011)の一連の研究がある。そのなかで堀越(2006)では、一昔前の学習者の動機は将来生活の糧となる外発的なものであったが、今は時代が変わり、日本人との交流や日本の若者文化への関心など内発的なものへと比重が移ってきており、特に日本のサブカルチャーに興味を持っている学習者ほど日本語能力試験の結果が高いことを指摘している(p.2)。先に述べたように、本調査結果においても上級話者は「賛成寄り」の支持であることから、仕事へのチャンスにつながることは否定していないまでも、初級話者に比べて外発的動機<sup>4</sup>は強くない。そして堀越(2006)の調査結果からの指摘や学習者の環境を考慮すれば、おのずと内発的なものが学習動機や学習継続の動機となっており、それが日本のサ

ブカルチャーであるかもしれないと推察できる。

以上、発話レベルによって上級話者と初級話者と分けて分析してきた。しかしながら、今回の調査では、上級話者 14 名の日本語学習歴は 3 年目が 1 名、5 年は 13 名であったのに対し、初級話者 19 名の日本語学習歴は 2 年目が 10 名、3 年が 1 名、4 年が 3 名、5 年が 5 名であった。これら年数の違いの要因がビリーフに影響を与えることも考えられるだろう。また、上級話者 14 名と初級話者 19 名という人数は十分であるとは言えない。しかし、本調査の結果は、本校における上級話者と初級話者のビリーフ傾向を示すことができたものとする。

## 5. まとめ

本調査の目的は本校学習者における上級話者と初級話者のビリーフを比較し、差のあるビリーフの要因を考察することにあつた。考察の結果を以下にまとめる。まず、上級話者は現状である程度十分なコミュニケーション能力を有しているという実感を持っており、且つ自らの習得能力を肯定的に捉えていた。一方、初級話者は、自らの会話能力が向上することに否定的ではないものの、現状としてコミュニケーションができる実感あまりないため、自信のなさが窺われた。結果から、「よりポジティブな上級話者、よりネガティブな初級話者」という対比が見て取れた。つまり、ビリーフの相違という観点から、両話者を分けたものは、具体的な学習方法ではなく、自信の有無などの心理面であつた。

また上級話者において、学習及び学習継続への動機は仕事といった外発的な動機はあまり強くなかったため、その原因を考察した。その結果、日本の若者文化、サブカルチャーといった内発的な動機が強いのではないだろうかと推察された。

JFL(Japanese as a Foreign Language)環境にいる台湾の日本語学習者にとって、上級話者となるのは「狭き門」である。願わくは、上級者が持つポジティブな信念を、他の大部分にあたる自信のない学習者にも持ってもらいたい。その為に教師は、知識や技術を提供するだけでなく、学習者の自信を育てるべく、支援者として心理面でもサポートも心掛け

<sup>4</sup> 動機づけ研究で有名な Gardner, R. C., & MacIntyre, P. D. (1991) は An instrumental motivation と呼んでいる。本稿では堀越(2006)の「外発的動機」という表現をそのまま用いることとする。



るべきだろう。なぜならば、学習者のピリーフが変われば、その能力も変わるかもしれないからだ。

今後の課題としては、さらに結果を明確なものにするために、学習年数による違いや調査人数を増やすことが挙げられる。また、今回対象としなかった中級話者の分析を加えることも挙げたい。

最後に、本稿の調査は著者が担当した会話クラスの学習者を対象としたが、ある程度他の学習者にも該当するのではないかと考える。これは大規模な調査を行っていないために断言はできないが、本研究の調査結果と考察、そして提言が本校だけに留まらず、台湾の多くの高等教育機関にも該当するものであれば幸いである。

## 参考文献

- 荒井智子(2007)「台湾人日本語学習者の学習スタイル調査研究--質問紙による調査と討論形式の調査をもとにして」『銘傳日本語教育』10:168-190
- 白井恭弘(2004)『外国語学習に成功する人、しない人』東京:岩波書店
- 白畑智彦・若林茂則・村野井仁(2010)『詳説 第二言語習得研究』東京:研究社
- ゾルダン・ドルニューイ(2006)『外国語教育のための質問紙調査入門』東京:松柏社
- 工藤節子(2001)「OPI で見る台湾の大学生の発話能力分析」『東呉外語學報』16:140-141
- 久保田佐和子「OPI と日本語能力試験における相関性の検証と分析—文藻外語学院日本語学科を対象として—」『文藻外語學院 98 年度教師專題研究發表暨研討會論文集』196-207
- 久保田佐和子(2012)「文藻外語学院における日本語学習者のピリーフについて」『文藻外語學院 98 年度教師專題研究發表暨研討會論文集』196-207
- 久保田佐和子(2012)「OPI と旧日本語能力試験との相関性から見た日本語学習者の発話能力—文藻外語学院の場合—」『東呉外語學報』6:196-207

- 日本語教育学会編(2005)『新版日本語教育事典』大修館書店
- 服部美貴(2002)「台湾の日本語学習者の言語学習の「確信」について—台湾大学の学習者の場合—」『東京家政学院筑波女子大学紀要』6:169-183
- 堀越和男(2006)「何が日本語を学びたいと思わせるのか」『いろは』23:1-2 財団法人交流協会日本語センター
- 堀越和男(2007)「日本語学習の動機づけとその成果—台湾の大学で日本語を専攻する学習者を対象に—」『臺大日本語文研究』14:76-101
- 堀越和男(2010:06)「台湾における日本語学習者の動機づけと大学の成績との関係—好成績取得者の動機づけタイプの探索—」『淡江外語論叢』15: 123-140
- 堀越和男(2010:12)「動機づけと学習ストラテジーが日本語学習の成果に与える影響—台湾の日本語学科で学ぶ学習者を対象に—」『台湾日本語文學報』28:259-281
- 牧野成一監修(1999)『ACTFL-OPI 試験官養成マニュアル(1999 年改訂版)』東京:アルク
- 牧野成一・鎌田修・山内博之・齊藤眞理子・荻原稚佳子・伊藤とく美・池崎美代子・中島和子(2001)『ACTFL-OPI 入門』東京:アルク
- 横山紀子・木田真理・久保田美子(2004)「日本語能力試験と OPI の相関関係による運用力分析: 技能バランスに焦点を当てて」『第二言語としての日本語の習得研究』7:81-99
- 林明煌(2007)「大学と院生の日本語学習ストラテジーの研究--言語四技能と文法の学習をめぐって」『臺灣應用日語研究』4: 79-102
- 林明煌(2010:05)「台湾人大学生の日本語学習についてのピリーフ調査票(BAJLLI)の開発」『2010 年應用日語教學國際學術研究會』61-81
- 林明煌(2010:12)「台湾大学生の日本語学習ストラテジー調査票(SIJLL)の開発」『台湾日本語文學報』28: 233-257
- レベッカ・L. オックスフォード(1992)『言語学習ストラテジー—外国語教師が知っておかなければならないこと—』宍戸通庸・伴紀子訳 東京:凡人社

- 盧錦姫・王福順(2009)「第二外国語としての日本語学習の動機づけと学習態度--静宜大学、修平技術学院の学生のアンケート調査を通して」『静宜語文論叢』2(2):117-149
- 盧錦姫(2010)「日本語学習についての台湾学習者のビリーフ--大学生のアンケート調査より」『静宜語文論叢』4(1):51-79
- 盧錦姫(2011:03)「台湾の大学生の日本語学習ビリーフに関する調査研究--日本語教育改善のための基礎データ作成を考える」『東吳外語學報』32:77-106
- 盧錦姫(2011:06)「日本語学習における学習動機、学習ストラテジーに関する調査研究--静宜大学日本語専攻学生の日本語学習を事例として」『臺大日本語文研究』21:131-159
- 盧錦姫(2011:12)「台湾の大学生の日本語学習ビリーフと学習ストラテジーに関する調査研究--日本語専攻者を中心として」『台灣日本語文學報』30:369-392
- 盧錦姫(2012)「台湾の大学生の日本語学習における目標志向性と学習ストラテジー研究--日本語専攻者を中心として」『東吳外語學報』34:79-106
- Gardner, R. C., & MacIntyre, P. D. (1991). An instrumental motivation in language study: Who says it isn't effective? *Studies in Second Language Acquisition*, 13, 57-72.
- Horwitz, E.K. (1987) Surveying Student beliefs about language learning. In A. Wenden & J. Rubin (Eds.). *Learner Strategies in Language Learning*. Cambridge: Prentice-Hall.